

文学教育の未来

—「文学」は国語教育に何をもちたらずか—

山元 隆春

1 はじめに

戦後日本の文学教育論の一つの極に、学習者が文学作品と直に接して抱いた感想や意見を表出させ、それを中心に授業を進めていくことの重要性を指摘するものがある。作品の表現から直に読者が捉え得たものに焦点を当てた文学作品の指導論が展開された。荒木繁の「民族教育としての古典教育―『万葉集』を中心にして―」（日本文学協会編『続日本文学の伝統と創造』岩波書店、一九五四年）に始まる「問題意識喚起の文学教育」論争は、この問題を焦点化したものであった。後にこの問題は、熊谷孝の『文学教育』（国士社、一九五六年）や大河原忠蔵の『状況認識の文学教育』（有精堂、一九六八年）、太田正夫の『想像力と文学教育』（三省堂、一九七〇年）、あるいは西郷竹彦の『文学教育入門』（明治図書、一九六五年）他の著作等、諸々の文学教育論に引き継がれていく。

このような主張の対極に、学習者の印象を優先させて文学作品を捉えるだけでは各々の分析・解釈に根拠がな

い、とする考え方もある。すなわち、作品に内在する諸要素を分析するという営みを文学教育の中心に据えていく考え方である。この考え方においてまず重んじられるのは、文学作品の表現そのものの微細な検討であり、作品を分析するための「ものさし」の設定である。アメリカ合衆国における「新批評」の展開を踏まえながら、川崎寿彦の『分析批評入門』（至文堂、一九六七年）や小西甚一の『分析批評のあらまし―批評の文法―』（『解釈と鑑賞』至文堂、一九七二年五月）、井関義久の『批評の文法―分析批評と文学教育―』（大修館書店、一九七二年）等において提唱された「分析批評」は、この方向で国語科における文学作品の指導に援用され、一定の役割を果たした。

いずれにしても、「文学作品」を介して子どもものことばの何を育てていくのかということがこれまでの「文学教育」においても重要な問題であった。そしてそれは「これからの文学教育」に関しても同じである。この研究協議では、「文学作品」を用いた教育実践がこれからのことばの教育にお

いてどのような意味で必要なものなのか、どのようなかたちでの教育実践が可能であり、子どものことばの育ちにかかわっていくことができるのかということを検討した。

2 他者の目をおして世の中や自分自身をとらえなおす力

木本一成氏の「中学校文学的文章教材の指導改善についての試み―文学作品をおして他者の目に気づかせる―」は、文学教育が読むことだけにとどまるものではないことを、改めて教える論考である。そして、読みの対象としての文学作品の成り立ちを、学習者が身を以て体験したときにこそ、理屈ではなく、文学の構造を彼らが理解し、自らの身になるのだということ伝える実践の報告でもある。木本氏は言う。

中学生に文学作品を用いた授業をするとき、いつも目標にしているのは、他者の目をおして世の中や自分自身をとらえなおす力を育てることである。

この木本氏のことばは、中学校における文学教育の意義を簡潔に述べたものである。「他者の目をおして世の中や自分自身をとらえなおす力」の育成ということが、木本氏の国語科授業の大きな目標であるが、氏の文学教育の目指すところも、この点に置かれている。「空中ブランコ乗り

のキキ」(別役実)の実践を検討したまじめにあたる部分で木本氏は次のように述べている。

「キキの決断はどこか」という問いへの答えそのものは重要ではないが、その理由を考える過程で、読者である自分の視点を自覚化したり、自分とは異なる視点に気づいたりすることができる可能性がある。

「読者である自分の視点を自覚化」することや「自分とは異なる視点に気づく」ことは、文学作品を読む学習が学習者にもたらすもののなかでも重要なことからの一つである。そしてそれが、学習者の成長にとって大切な要素であることは言うまでもないだろう。このことをさらに追求したのが「サーカスの馬」(安岡章太郎)の実践である。ここでは「語り手」である「ぼく」という存在に学習者を自覚的にさせていくことが目指されている。

このような小説の学習を経て、木本氏は次のステップとして「大人の視点から見た中学生」という「創作文」の学習に進む。読むだけでは必ずしも一人ひとりの学習者に明確になっていなかったと思われる「他者の目」が、「創作文」を書くという行為を通じて学習者の腑に落ちることになった。木本氏の報告のなかに見られるのは、氏のことばをお借りすればまさしく、「他者の目」を自分の中に取り込んでいく姿であった。

木本氏の取り組みは、小説でなければできないことの1つを教えてくれる。と同時に、文学教育が読むことだけにとどまるものではないことを教えてくれる論考である、そして、読みの対象としての文学作品の成り立ちを学習者が身を以て体験したときにこそ、理屈でなく文学の構造を彼らが理解し、自らのものになるのだということを伝える実践でもある。

3 解釈する自分を批評しながら読む——二重の目的——

松本誠司氏の「読むことの対話的交流を目指す授業——芥川龍之介『羅生門』による学習者の読みの交流——」は、これまでの松本氏の授業実践を踏まえながら、「作者」を捉え、その批評態度を明らかにすることを目指す、ということを中心としたものであった。そしてイーザーの受容理論に依拠しながら、個人内の読みを集団の読みに関わらせていく方策を試行するものであった。

松本氏は「羅生門」の実践に取り組むにあたって、次のような問題意識を示している。

○一年度実践では「下人」の生を価値つけた上で、現代に生きる者の視点を学習者自身が解釈へ取り入れることを目標としていた。ここでは「下人」へのプラス・マイナス双方の評価は解釈として得られたが、評価者としての学習者自身が前景化しており、印象批評に近い解釈

もあった。また、学習者の解釈に影響を与えたのが作家芥川なのか、テキスト内に設定された「作者」なのか不明瞭で、「作者」の批評態度を明らかにできなかった。

そこで、テキストの語りの部分と語られる部分とを峻別し、評価者としての「作者」を意識しながら、「下人」の生き方を現代の視点で見つめさせたいと考えた。(中略)山元) ○四年度実践では、ほとんどの読者が「羅生門」を読む過程で何度も出現する「作者」を意識してしまふことを手がかりに、教授者からの補助線として「作者」の語る行為の存在について学習者に伝えることを試みた。

「作者」の批評態度を明らかにしていくことで、登場人物の捉え方に深まりが生まれることが期待されている。と同時に「作者」の語る行為」について学習者が自覚的になることができるなら、小説テキストを重層的に捉えることが可能になるという仮説を、そこに読み取ることができる。考えてみれば、作中のアイロニーを理解することができるのも、「作者」と「登場人物」とのあいだの重なりやずれを意識することができる場合である。松本氏の試みは、そうした力を伸ばす営みである。

この実践を通じて松本氏は「羅生門」を通して学習者が得ることのできる観点として、次の三つを指摘している。

○「作者」という明確な登場人物によって「語り方」に注目することができる（方法への接近）

○「作者」に注目することで物語内容への批評意識の読み取りに近づける（メッセージへの接近）

○批評視点が自己評価へと及ぶことで小説の与える読者への影響を考える入口に立てる（自己への接近）

その上で氏は「文学作品そのものを読み解くと同時に、その『羅生門』を解釈する自分を批評しながら読むという二重の目的」を設定することの重要性を述べている。松本氏の提案にあつては、対他者ということを経て、対自分というところに進んでいくということが重要な点である。少なくともその営みのなかで、生徒各自に、自己内の対話・葛藤がいざなわれたと見ることができよう。

「作者」の批評態度を探り、そのことで得たスタンスを保持しながら、語られた「物語内容」を捉えていくことが、松本氏の言う「二重」の目的意識を学習者のうちに育む。そのことが読者として自立するための大切な条件となるのだ。

4 「内的主体性」を立ち上げる文学の授業

出雲俊江氏は、「教室を現実の中におく試み―内的主体性を立ち上げるために―」において、「内的主体性」を保ち続けるための営みが文学教育であるという主張を展開し

た。出雲氏は「山椒魚（井伏鱒二）の授業を試みるにあつて、次のように述べる。

勤務校の生徒らが、彼らの生活の中から受け取るメッセージは乏しく、驚くほど表面的である。そのメッセージの受け取りの貧困は、生徒には社会の大きな枠組みだけしか見えないことにつながっている。まずは、その社会の枠組みの中で、無力感を抱きつつ生きる生徒自身に、自己の存在感や力を感じさせることが必要である。私は、そのために文学と文学の授業は有効だと考えている。（中略）文学作品に触れ、作者が目に見えるモノを介して語る作者の世界をイメージすることは、生徒自身が、周囲のモノからその背後の意味や関係を感じられるようになるための貴重な練習となるはずだからである。

このような記述のなかに、出雲氏の文学教育に対する思いが浮かびあがる。すなわち、「自己の存在感や力」を生徒に感じさせる働きを文学の授業が担うのだとする見解である。

このことは、なぜ文学教育が必要なのかという問いを問うことにもなるだろう。生徒の皆が皆、生涯にわたって文学が必要だというわけではない。むしろ、卒業してしまえば小説を読むことのない生徒はいくらでもいるだろう。しかし、出雲氏の「山椒魚」の授業は、小説の読者を育てる

ことをめざしたわけではない。「周囲のモノからその背後の意味や関係を感じられるようになるための貴重な練習」のためのアイディアが、出雲氏の場合、「山椒魚」という小説だったのである。そこにあるのは、小説を用いて、高校生の「内的主体性」を立ち上げさせていくという意図性である。そこには、「未来」を生きていく力を育んでいくとする、教師としての強い意思が表明されている。

5 おわりに

三氏の提案に共通するのは、いずれも文学の授業において「自己」を探究することを目指しているという点である。作品に触れて、自らが抱いた感想なり意見を教師や友人と交流し、その上で再びそれを自身の問題として引き受けていく。その過程で、他ならぬ自身との対話・葛藤が営まれるということが、三氏の実践に共通して見られたことであつた。文学作品を用いて営まれる授業がなぜ必要なのか、何をめざして営まれるものであるのか。三氏の提案はそのことを考えさせるものである。

冒頭に触れたように、「文学作品」を介してどのような学びが子どものうちに成り立つのかということ、文学教育を進める私たちは考えて行かなくてはならない。この研究協議に登壇していただいた三氏はいずれも、「文学作品」を読んで、感想や意見を交流する過程で、一人一人の生徒のうちに育つものが何かということを教えている。作品に

触れて生徒たちが抱いたことを、表現する手だてを工夫しながら表現させ、交流し、考え……といった活動を繰り返し営むことで、世界を理解し、解釈するための枠組みが生徒たちの内に形成される。であろう。それは長い時間をかけて育てなければならぬものではあるが、文学作品を読み、考え、話し合うことを通してかたちづくられるものでもあると言えるだろう。文学教育の「未来」は、そのような営みを継続していくことができるかどうかということにかかっているのである。

(広島大学)